

「静岡県立大学グローバルCOE—カリフォルニア大学バークレー校
ジョイントカンファレンス」開催

グローバルCOEプログラム事業推進担当者
教授 奥 直人
教授 今井康之
教授 小林裕和

昨年9月、「グローバルCOEプログラム」研究拠点形成事業の一環として事業推進担当者4名が、薬食同源研究の国際拠点形成に向けてカリフォルニア大学、オハイオ州立大学及びニュージャージー医科歯科大学を訪問し、これらの大学院との連携体制を整備いたしました（はばたき104に掲載）。この下地をもとに去る6月13日～14日に、カリフォルニア大学バークレー校の研究者3名を招聘し、本学とのジョイントカンファレンスを開催しました。これは、大学院生を最先端研究者に触れさせることにより、研究への興味を喚起し、英語でのコミュニケーション能力の向上を図ることを目的としています。

1日目は、学長と面談後、小講堂において同校の研究者3名によるセミナーが行われました。Gian Garriga 教授（遺伝子学・ゲノム学・発達学分野、分子細胞生物学部）は、「線虫の神経発達におけるWntシグナル」について、Qiang Zhou 教授（生化学・分子生物学分野、分子細胞生物学部）は、「7SK：転写や細胞成長、形質転換の調節因子としての核内低分子RNA」について、Robert S.Zucker 教授（ヘレンウィルス神経科学研究所、神経生物学分野、分子細胞生物学部）は、「シナプス神経伝達の生物物理学的解析：短期可塑性、神経調節、SNAREの相互作用について」について講演されました。いずれも最先端の研究内容で、多少理解するのが難しかったと思いますが、大学院生、若手研究者には大いに刺激になったことと思います。

続いて、本学の後期博士課程大学院生4名により、英語による研究発表が行われました。畑中順也君（薬学研究科・医療薬学専攻，1年）は、「可溶化コエンザイムQ10製剤の物理化学的ならびに薬物動態学的特性評価」について、小山直己君（生活健康科学研究科・食品栄養科学専攻，2年）は、「代謝活性酵素CYPを過剰発現したヒト細胞を用いるアクリルアミドの遺伝毒性」について、新免拓弥君（生活健康科学研究科・環境物質科学専攻，1年）は、「UVA照射は9,10-phenanthrenequinoneが誘導するヒストンH2AXのリン酸化を亢進する」について、稲井誠君（薬学研究科・製薬学専攻，3年）は、「ミリオシンの全合成」について発表しました。一流の研究者との質疑応答はよい経験になったことと思います。鈴木雅近理事長、西垣克学長にもご臨席を賜り、他に教職

員 51名、大学院生 89名（博士後期課程 34名、博士前期課程 55名）、ポスドク・学生 17名、招聘研究者を加えると計 164名が、小講堂を埋めました。



会場写真



会場写真

新しい試みとして 1 日目のカンファレンス終了後、三保のホテルにおいて、研究者と後期博士課程大学院生との泊まり込みの交流会を行い、著名な研究者と身近に接して会話する機会を提供しました。参加者は、両研究科長、若手教員 6名、大学院生 15名、ポスドク 1名の計 27名でした。

2 日目は、はばたき棟 3 階第 3 会議室において、3名の教授により、本学の研究紹介が行われました。事業推進担当者など計 34名が参加しました。野口博司教授（薬学研究科・薬学専攻）は、「Ⅲ型ポリケタイド生合成工学に基づく化合物ライブラリー構築」について、小林裕和教授（生活健康科学研究科・食品栄養科学専攻）は、「葉緑体—その進化と適応」について、鈴木隆教授

（薬学研究科・薬学専攻）は、「スルファチドはインフルエンザ A 型ウイルスの複製に必須である」について講演いたしました。招聘研究者と活発な討議がなされました。

終了後、3名の研究者は、薬学研究科及び生活健康科学研究科の研究室を訪問し、意見交換を行いました。短い時間でしたが活発で有意義な研究交流ができました。



会場写真



セミナー終了後撮影

2日間のスケジュール終了後は、市内のホテルにて懇親会を行いました。鈴木理事長、西垣学長も参加され計40名で、楽しいひと時を過ごしました。パークレー校の3名の先生方から、後日お礼状を頂きましたが、いずれの先生もとても満足していただき、また本学との交流をさらに深めたいとのことでした。本学の大学院生及び教員にも今後の研究への活力を与えることができた有意義なカンファレンスとなりました。ご協力いただいた教職員の皆様、特に若手教員、グローバルCOE担当の事務職員に心より感謝申し上げます。



3教授を囲んで懇親会を開催